

34. 南相馬市における仮設住宅入居者への 継続支援から健康課題への取り組みについて

○川口敦子（旧所属 摂津市地域包括支援センター 現所属 摂津市高齢介護課）
ト部裕美 丹羽和人 小西仁（摂津市） 池田雅光（摂津市社会福祉協議会）
高鳥毛敏雄（関西大学社会安全学部）

【 研究の目的 】

地震、津波、原発という複合災害の被災地である南相馬市には、平成24年5月現在、約2,000戸の仮設住宅が建っている。原発災害により家族離散などによる喪失感、将来への不安を抱える生活は多くの健康被害を生じている。孤立死やアルコール依存症、自殺なども増加することが予測される。仮設住宅におけるこれらの課題の対応としては人と人のつながり、コミュニティづくりが重要である。平成23年7月から12月まで4回、ボランティア保健師として仮設住宅集会所で「日曜サロン」の支援を行っている活動から、仮設住宅入居者のコミュニティづくり、健康課題への取り組みについて考える。

【 研究の必要性 】

南相馬市は、震災当初市域が、「警戒区域」「緊急時避難準備区域」「計画的避難区域」に区分され、警戒区域以外には、住民が住んでいるにもかかわらず、保健師の派遣も、ボランティアも対人保健サービスの支援者も入らない孤立状態となっていた。現地の保健師も職員も被災者でありながら目の前に迫る業務に対応する日々であり、支援者が入らないことで現地の状況が周囲に伝わらないという深刻な状況にあった。徐々に支援者が入るようになったが、今なお、いつ戻れるかわからない不安、家族との離ればなれの生活、放射能に対する恐れの中、非日常をすごさなければならない状況は続いている。

200戸の大規模な仮設住宅や自治会が組織されていない住宅、震災時の地区がさまざまな人が混在している仮設住宅も多く、新たなコミュニティの形成は容易ではないと思われる。コミュニティづくりを目的とした「日曜サロン」の活動支援から、仮設住宅入居者の健康課題への取り組みを研究することは、被災者支援の一つの方策として意義があると考えられる。

【 実施計画 】

被災地への訪問は概ね6か月に1回とする（本研究機期間において2回の訪問を行う）。ボランティアスタッフは、市保健師、市事務職員、市社会福祉協議会職員、他機関の栄養士、公衆衛生医師など多機関、多職種によりチームを編成する。それぞれの立場で、サロン活動の意義を考えながら入居者同士が「顔なじみの関係づくり」ができるよう配慮しながら活動を行う。また、現地の支援者との交流を図り南相馬市の現状を広く捉えた中で仮設住宅入居者の状況について理解する。また、その状況を現地支援者とも共有を図る。

〈サロン活動〉

- ・南相馬市の仮設住宅 2 か所を訪問し、若い人や子ども、男性や就労している人など平日の昼間にいない方々も参加できる「日曜サロン」の開催を支援する。
- ・「サロン」は仮設住宅入居者同士の交流がはかれるような内容、主体的に参加できるような構成とし、参加者が中心となって進めてもらう。
- ・参加者同士が、会話がもて顔なじみの関係をつくっていただく。また、体調や困りごとなど共通した話題について話しを深めてもらう。
- ・具体的な内容は「たこ焼きパーティー」とし、それぞれで焼く楽しみ、また待つ時間に会話を楽しんでもらい「食」を介して近い関係を感じてもらおう。
- ・サロン開催の案内チラシを作成し、事前に仮設住宅の自治会長にお送りし、会長も主催者となっていただき、回覧板などで広く周知を図っていただく。
- ・サロン当日は、ボランティアスタッフが全戸個別訪問し、サロンの案内とともに「今の暮らし」について聴く。顔色や話し方、話の内容に気を留め心身の健康状態の把握に努める。
- ・活動の実施にあたっては、現地鹿島区社会福祉協議会の協力を得、実施後は内容の報告を行うなど情報の共有、連携を図る。

〈支援者との交流〉

- ・南相馬市の職員（事務職、保健師）との会合をもち、震災直後の状況や現在の状況について、市職員として、保健師として、また一人の被災者としての行動や思いを聞く。
- ・鹿島区社会福祉協議会職員、NPO 法人サポートぴあ職員、いわき市出張所の保健師を訪問する。震災当時の状況や支援者の状況、他市に避難している被災者の状況や仮設住宅の状況を知る。
- ・小野田病院（南相馬市原町区）を訪問し、医師や看護師から現在の市民を取り巻く医療、介護の現状、医療スタッフの課題や状況について知る。

【 実施内容 】

◆案内チラシ

事前に自治会長さんに回覧をしていただきます。
当日にスタッフが戸別訪問し案内します。



保健師ボランティアチーム 南相馬市活動経過

日付	ボランティア派遣	出来事・活動内容	参加スタッフ	支援者の方との交流・講師依頼など
H23年3月11日		・東日本大震災発生		
5月16日～21日 (月) (土)	第1次ボランティア派遣	・全国保健師ボランティアチーム福島県庁からの依頼を受け、相双保健所管内南相馬市にて支援活動	保健師5 公衆衛生医師1 ジャーナリスト2 現地ボランティア1	・会津美里町にて福島県双葉郡 保健師との交流会
7月7日～8日	事前調整隊	・保健所、保健センター、社会福祉協議会にて今後の派遣のあり方を調整	保健師5 ジャーナリスト1	・原町区小野田病院にて南相馬市 民と語る会 ・宮城県女川町保健師 訪問
7月16日～19日 (土) (月)	第2次ボランティア派遣	・応急仮設住宅におけるサロン開きの支援開始 ・ 鹿島区小池第3地区(127世帯) 第1回 日曜サロン ⇒ スイカのサロン会 ・大阪(福島)うまいもの歌	保健師5 公衆衛生医師1 ジャーナリスト2 現地ボランティア1	
9月3日～4日 (土) (日)	第3次ボランティア派遣	第2回 土曜サロン ⇒ 三線で歌おう踊ろう会	保健師3 ジャーナリスト1 ケースワーカー2	
10月8日～10日 (土) (月)	第4次ボランティア派遣	第3回 日曜サロン ⇒ お芋のサロン会	保健師4 栄養士1 ジャーナリスト1 行政事務職1	・日本赤十字秋田看護大学にて 「福島原子力発電所立地地区の 保健師と被災地の報告を聴く会」
12月3日～5日 (土) (日)	第5次ボランティア派遣	先の見えない不安、子どもと一 緒に住み続けている事への自 問自答。アルコールも手伝って 男たちの気持ちが現された会	保健師5 公衆衛生医師2 栄養士1 ジャーナリスト1 行政事務職3	・南相馬市保健センター、相双保健 所、福島県庁へ報告会
H24年5月12日～13日 (土) (日)	第6次ボランティア派遣	第4回 日曜サロン ⇒ たこやきパーティー	保健師3 公衆衛生医師1 社会福祉協議会1 行政事務職3	・原町区小野田病院、いわき訪問 (医師のみ)
8月25日～26日	第6. 5次ボランティア派遣	小高区(10km～20km)の 民家の片づけ 参加者：楳津市行政職4名		★南相馬市社会福祉課との 意見交換会 ★特定非営利活動法人 サポーターセンターひびあ 訪問 ★原町区小野田病院訪問 ★いわき出張所 交流会 ・大阪府市町村保健活動連絡協議 会にて ・「東日本大震災から学ぶ公衆衛生 看護活動～避難所 活動とクリフケアを通して～」 南相馬市 松本和子 保健師 ・大阪府摂津市にて 「摂津市地域福祉のついでい～東日 本大震災 南相馬市の被害者支援 から見えてきた大切なこと」 サポーターセンターひびあ 青田由幸氏
11月22日～24日 (木) (土)	第7次ボランティア派遣	第5回 土曜サロン ⇒ たこパ〜と男談の会 第6回 土曜サロン ⇒ 「ほっけめし」ど「たこパ〜」の会 第7回 土曜サロン ⇒ 「たこパ〜」ど「クレープ」の会 第8回 土曜サロン ⇒ 「たこパ〜」ど「クレープ」の会 第9回 土曜サロン ⇒ 「たこパ〜」ど「クレープ」の会 第10回 土曜サロン ⇒ 「たこパ〜」ど「クレープ」の会 第11回 土曜サロン ⇒ 「たこパ〜」ど「クレープ」の会 第12回 土曜サロン ⇒ 「たこパ〜」ど「クレープ」の会	保健師4 社会福祉協議会1 行政事務職3	・朝日新聞 連載記事「プロメテウスの翼」でも有名な青田さん。「一番つらいのは忘れられること。もう福島は大丈夫なんだろうと...」
H25年5月11日～12日 (土) (日)	第8次ボランティア派遣	第6回 土曜サロン ⇒ 「たこパ〜」ど「クレープ」の会 第7回 土曜サロン ⇒ 「たこパ〜」ど「クレープ」の会 第8回 土曜サロン ⇒ 「たこパ〜」ど「クレープ」の会 第9回 土曜サロン ⇒ 「たこパ〜」ど「クレープ」の会 第10回 土曜サロン ⇒ 「たこパ〜」ど「クレープ」の会 第11回 土曜サロン ⇒ 「たこパ〜」ど「クレープ」の会 第12回 土曜サロン ⇒ 「たこパ〜」ど「クレープ」の会	保健師4 栄養士1 社会福祉協議会1 行政事務職3	・小高区(20km圏内)での片づけ手 伝い ・保健センター保健師との交流会
12月予定	第9次ボランティア派遣			



◆仮設住宅戸別訪問◆

サロンのご案内をします。玄関から、時には掃出し窓から…
いろいろなお話しをさせていただきます。



◆仮設集会所での
たこ焼きパーティ◆

出来上がるまでの待ち時間が絶妙！
自然と会話が弾みます。



◆男談の会結成◆

男性は、集会所の外で自前のお酒を手に宴会です。



◆小高区の今◆

警戒区域にあったため、地震の被害がそのままです。

(2013. 5. 12)

【 結果 】

仮設住宅は、県外からのUターンによる新たな入居や、家族で一緒に住むためにと家を建て仮設を出ていかれる人など、コミュニティが形成されにくい状況が大きくなっていった。震災当時は「大変だったね。」という会話で繋がった気持ちが、日にちの経過とともに一人ひとりの課題となり自分一人では解決できない壁となってきた。「日曜サロン」で初めて顔を合わせる人もあり、震災のこと、家族のこと、日々のこと、思い思いをあらためて話しができる機会となった。サロンをきっかけに「出会ったら挨拶するようになった。」と聞く。お互いに気かけあい、孤立感を持たないことがとても大切でありそこにサロン活動の大きい意義があるといえる。

また、世帯数が少なく出身地区が同じ仮設住宅では、自治会長が中心となり毎朝のラジオ体操の実施や、その後集会所でお茶を飲まれるなどできるだけお互いに顔や声かけなどの交流が図られる仕組みを作っておられた。サロン開催時に、男性のみのテーブルを設け、各々家からアルコールを持参しての宴会となった。一人ではない、という思いを感じた。

活動の状況は現地の社会福祉協議会の職員や市の保健師に情報提供し、日頃の地域活動にも活かしていただくよう連携を図っている。

【 考察とまとめ 】

サロン活動における「男談の会（男性の飲み会）」を一例としてみると、夜間の時間帯や飲酒を伴う活動は行政や社会福祉協議会においては開催しにくいものであろう。しかし住民にとっては日頃馴染んでいる人の集まり方であり、そのニーズがあった。住民の慣習や暮らし方を踏まえ支援を行うことは、重要な視点である。集まる機会の提供、入居者の主体性をひきだすサロンは入居者の日々の暮らしに繋がり、課題解決の力をひきだすことができる。サロンでの会話は個々に持つ課題を見えやすくし、また共通の課題として捉え、必要な支援も見えてくる。支援に入るボランティア保健師は、被災地である現地に行って見て、聞いて課題を捉える力が必要であるとともに、実践した活動を現地の関係機関の職員等に役立つ情報として提供できるよう連携をはかる力も重要であると感じた。被災地には、様々な機関（行政や職能団体）や形態（公的派遣やボランティア）の支援が入る。それぞれが特色を生かし住民のニーズや課題に対応した効果的な活動ができるようコーディネートが重要である。

仮設住宅入居者は、今なお先のみえない不安、心身に多くのストレスを抱える非日常にある。被災者の気持ちを支援する活動はまだまだ必要である。

【 経費使途明細 】

仮設住宅サロン活動事業食材料費（3回分）	64,891 円
交通費（大阪⇄福島）（3人・2回分）	210,000 円
レンタカー・ガソリン代（2台・2回分）	96,411 円
通信費（はがき、切手、郵送代等）	1,390 円
消耗品費（腕章代、写真紙代、文房具代等）	2,700 円
合 計	375,392 円